

既に戸籍帳にのせられてむ容易に書き直すことの出
 來ぬ規則であることを世の父母たちがよく承知である
 か如何 田中正造と申す代議士と田中正藏と申す神田
 の活版職と間違つてわならぬから藏と造と書き違せぬ
 ようにとするわまだ少しわさこえるが、ちをいちと書
 いてわるいのはつをどつと書んでわならぬの戸籍帳に
 片假名でかいてあるからにわ平假名で書いたものを取
 り上げられぬということでも實に究屈でわなにか、それ
 も御上の規則で仕方がないとあきらめるならばせめて
 わ此後此世に生れる多くの子供に此迷惑をかけぬよ
 に男兒には漢字を用ゆるにもせよ誰にも讀めて自分で
 わ書きやすというを第一とし女兒には先頭文部省で
 定めて出された平假名で書くときめたいものでわな
 かか？

むつかしい讀みにくい漢字で名を付けて其子の縁起

を祝ひ幸福を祈り賢人ふらするのわ鬼の面をかぶつた
 り銀紙を張つた木刀で子供や女をおどす盜賊が金箔と
 からだ一面に塗りつけて自分を神さまふろーとして體
 内から悪るい氣の逃げ出る孔をふさいで死んだ馬鹿坊
 主とおなじいよりの者だ！

印度土人の家庭生活 (承前)

Y. I.

若し信心深く、閑暇のある婦人ならば、庭園から數
 枝の花を手折つて、最寄の神社に詣で、少しばかりの
 菓子と賽錢とを、神様に獻げるのです。けれども、こ
 れよりも、猶普通に行はれて居ることは、各の住宅
 の庭内に、四角な臺を作つて其上に安置してある、羅
 勤どか申して神聖なる植木の周圍を、この信心な婦人
 達は低聲で、何事か唱へながら、グルグル廻つて満足

して居ます、夫で時によると、百八度廻りの願をかける婦人も、あります、最も敬神の念が深くつて閑暇のある婦人どきます、数千度も廻るのですが、これは非常に熱心な印なので、寡婦か、さもなければ、何か特別な誓願のある婦人で家事に餘かゝはりのない者の外には、こんな事をなすことは稀です。

家族で使ふ丈十分の水を汲でから、家の掃除をなし終ります、晝餐を用意する時間となり、これは主婦が直接に、監督しなければならぬ、大切な務でございます、大抵は主婦自ら食物のある部分を調理いたします、食物の重なるものは、種々の穀物の粉を、いろ／＼に調理したものでありまして、御飯やカレーや野菜や牛乳など、又特別の場合に限用ふる砂糖漬のやうなものは、其一部分で、ございます。

この料理を始める前に、臺所の床を洗ひ諸々の器具

を磨くことは、申すまでもないことですが、驚くべきことは、これに係る婦人たちは皆入浴して絹布を着更てから、はじめて此料理にとりかゝります。印度人はこの點に付ては非常に嚴重ですから調理する際、もし齋戒沐浴しない人に、觸るやうな事があろうものなら、大變なのです、忽ち潰されてしまふのですから、再び入浴して更に新たに絹布をきかへなくては、その料理した晝餐は、全く不潔なものとなつて仕舞つて、家族の人々に供するのに適しないものと、なつてしまふのです。

そこで食事の時が、近づきます、男子も庭内に入浴いたしましたして、各食事の時にのみ用ふる特別の絹布を、さますのですが、これわ腰から下に巾の廣い切を、纏ふのみで、上半身は裸體のままなのでございます。

さて食堂では、小兒も一所に、つらなりしますのです

が、婦人達は晝餐を食堂に運ばして、先づ少量を神様にさしげまして後男子と小兒どに供へます。青葉を皿に用ふる風習が、ありませんが、スプーンやフォークは、供へる時のみ、用ひるので、各自は皆指で食べます。酒類は一切宗教の禁する處となつて居ります故に水の外は何も飲料に用ゐませぬ。

妻たるものは其良人に待りて、給事する特權を有するので、若し年のわかき妻が、その良人に給事することを、禁せらるゝことがあらば、それは甚しき譴責を、意味するので、之より大なる罰はないのでございませぬ。

男子の食事が、すんでから後で、婦人たちは、席について、食事をしますが、この様に、一家内の男子に給事して、それから、あとで自分が給事する様なことは、印度の婦人たちでこそ、少しも、苦勞とはお

もはずに、出来るのですが、これかもし英國の婦人であつたならば、とても辛抱の出来ることでは、ありません。

つまり印度人のためには、食事することは全く、宗教的なので、男女ともに、食前には入浴更衣しなければ、ならぬ位ですから、婦人達は食物を調理すること、苦勞としないばかりでなく、反つて、この務をなすことを、光榮と思ひ、周到なる配慮をもつて、親愛なる家族の男子と小供どに、食物を供し満足させて、食堂を去らしむるのでございませぬ。

この大切な務を、えてしまいますと。婦人達は、暫時休憩いたします。

で、印度では、妻たるものは、その良人の食べのこしを、食べ終る特權を持つので、ありますが、この事は時々印度人の人情風俗をよく知らない人々は、耻辱

のやうに、云ひふらし、ますけれども、印度の婦人は、反つて、之を光榮といたします。なせと、申しますのに、婦人達は、これを最も親密なものにのみ、許されたる特權と見做して居るからでございませう。

夫から又、印度では、階級によつて、人々を離隔することが、甚しう、ございませうから、丁度英國などで他人の用ひた齒刷牙を、つかふものは、ないやうに、印度人は、他人の飲食せし器具を決してつかひませぬ、唯妻たるもののみ、階級の習慣によつて、良人と同じ食器を、用ひることを許されて居ます。

印度人の重なる食事は一日にたゞ二回即ち晝餐と晩餐とで、あります。後者は前者のたゞ小なるものなのです。

婦人達は晝餐後、臺所と諸々の器具を洗ひきよめて、それから、衣服をさかへせして、一時頃より、四時か

五時頃まで、暫らくは、閑暇になるのですが、この二三時間を、どういふ風に、過すかは、主婦たる人の意志と嗜好とに大なる關係があります。保守的家族では、主婦は年若婦人に、讀み書きすることを、許しませぬ、これは多分婦女を教育すると、主婦の威嚴を軽く、しはしないかといふ恐があるからでせう、ですから大低、印度の女子は普通の意義で無教育であります。

そこで主婦は、その監督の下にある婦女達を、よく管理するに足る、教訓者でなくては、ならないので、あります。然し主婦たる人が、親切な人ならば、此二三時間の、すこし方に付ても、よほど寛祐にして居ます。

いかにせむ都の春もおしげれど

なれしあづまの花やちるらん